

# FD研究：授業分析における「授業場面」の重要性について

－授業を「解り易く手直しする」上で大事なこと－

日下 和信

大阪キリスト教短期大学

## 1. 議論の前提として

- ・ 良い授業の定義：「学習者に理解できてこそその良い授業」「理解できれば良い授業」
- ・ 授業の3要素：「授業者・学習者・学習内容」3要素が最適な状態で重なった時「最良の授業が出現する」と考えられる

## 2. 授業の流れと授業場面

解り易い授業を行おうとすれば、「学習者側から見た時、学習内容がスムーズに連続していること」が望ましい。そのために授業者側は、「授業の流れ」を十分に工夫する必要がある。学習者の既習経験を予測し、学習がうまく繋がっているようにお膳立てをすることが大切である。この思考の連続性が確保されていれば「解り易い授業」になるが、この連続性が途切れると「その時点で解らなくなる」のである。その時は、大急ぎで「途切れを繋ぎに行かねばならない」。その間髪を入れない修正が出来たならば、「アナタは授業上手である」。

解り易さに関しては、「学習内容の連続性」が大事な点だが、その学習を如何に実現するかという点では「具体的な授業場면을どのように繋いでいくか」が次の問題になる。そこで、明確な定義はなかなか難しいのであるが、「授業場面」について簡単に記すと、「ある1つの明確な学習課題の学習が始まるシーンから終了のシーンまで」を指す（ある学習内容が、さらに分割して考えられる場合は、サブ授業場面が考えられることになる）。即ち、ある授業場面では、「あるハッキリしたテーマで学習が組み立てられている」ことになる。授業の観点から見れば、区切られた授業場面が続くことになる（当たり前）。「授業場面」数については、45分の授業では、1～2つで、90分の授業でも1～3つに止めたいものである。多くなると話が錯綜し、思考が分散し、効率の良い理解に至らないからである。授業場面という言葉は、慣用的に使われているが、肝心な点は「授業の良不良を正確に分析するための枠組み」として意識的に使われているかどうかである。長年の授業研究の経験から、「授業場面の重要さ」に、今さらながら感心している。全体の授業時間の設計から、「授業場面」の設計、「サブ授業場面」の設計という手続きを考えると、1つの「授業場面」をどのように学ばせるかという方針を決めることが、学習の成果に直結するからである。その重要性を感じるものとしては、06年3月この研究会で発表した「5段階授業パターン」と「授業場面」を設計する考え方に関するものである。（以下略）

## 3. 思考が途切れた授業場면을研究する

授業改善にとって、「特定の授業場面」を対象にして、「授業中に生じた現象」に関して議論を集中することはとても大切なことである。本当に有用な授業改善は、“授業として”意図的に働きかけた結果に対して、「学習者がどのような反応を返してきたか」を分析し、望ましい反応が得られるようにするには「何を、どう変えればよいのか」をキッチ

リと具体的に議論することである。単に全般的印象による「授業の良し悪しの評価」で留まることなく、「その欠陥を取り除き、スムーズな理解へと導いてこそ」授業研究の成果になるということである。

実際には、連続する授業場面の中で「理解できない授業場面」が発生したら、“その授業場面でどうして理解できなくなったのか”をしっかりと分析して、思考の途切れた原因を確定させるところまで検討することが大事なのである。その時、授業場面を限定し、検討の視点としては、「授業者の力量・学習者の既習経験と理解力・両者に適切な学習内容」であったかどうかを多面的に分析していくのである。この作業が正に、「授業改善の作業」であり、次回の授業で「同じ過ちを繰り返さないための対策会議」なのである。ベテランになって来て、授業をしながら、授業の様子が冷静に観察できるようになると、「理解できない授業場面」が発生したら、その直後に気づき得るし、どの説明・やり取りの所で思考が切れたかも、かなりの確からしさで洞察できるようになる。その基本は、授業中、学習者の反応に良く注意が配れているかどうかになる。学習者を見ないで授業をするということは、そもそも「解る解らないに無関心な授業態度」で、FD・授業改善に関心をもたれている先生にふさわしいやり方とは言えないと思われる。学習者に顔を向けて、余裕を持って観察できるようになると、思考の途切れた場面が瞬時に解るように自然になれる。表情の変化は動物的感觉で読み取るため、ほぼ誰でも出来ることである。ぜひ、授業での観察力を磨くようにして頂きたい。

#### 4. 解り易く手直しするための主な方法

以下、筆者の経験に即して、「躓いた授業を解り易く手直しする方法」を簡潔に紹介しよう。

##### ◎「アドリブでの授業の再構成が出来る」のが理想

「解らなくなった反応」を読み取れば、直ちに授業案の再構成をして（所要時間1分以内が理想的）、最小限の迂回コースを作って授業を続行するのが、“最高に格好良い手直しになる。”

##### ○説明が速すぎる→ゆっくり似たような説明を

単純な原因ながら、しばしばしてしまう失敗である。教える内容と時間の関係で、「急ぎ目になっている」とこの失敗をしてしまう。

##### ○内容の関連性が押さえ切れていない→学習の全体像を教えてからにする

授業者側は、順々に授業を進めていっているのであるが、学習者側は、「段々と何が何だか解らなくなってくる」。話の切り替わり点が明確でなく、どの部分の説明であるかが区別できなくなる時に起き易い。学習の全体像を図解するなどしてやると防止できる。

##### ○抽象的説明で、内容が取りにくい→説明法を冷静に考えてみる

こんな学習場面は、難しくなり易い。用語や説明法を学習者の身になって良く検討する。

##### ◇授業後：短い「授業の感想を書かせる」→それを読む

筆者は、この方法をずっと実行してきている。「授業の苦情改善法」<sup>(1)</sup>と銘々して推奨している方法である。

2007. 11. 15

1) 日下和信。『放送教育開発センター研究報告 103号』109～117頁。1997年3月